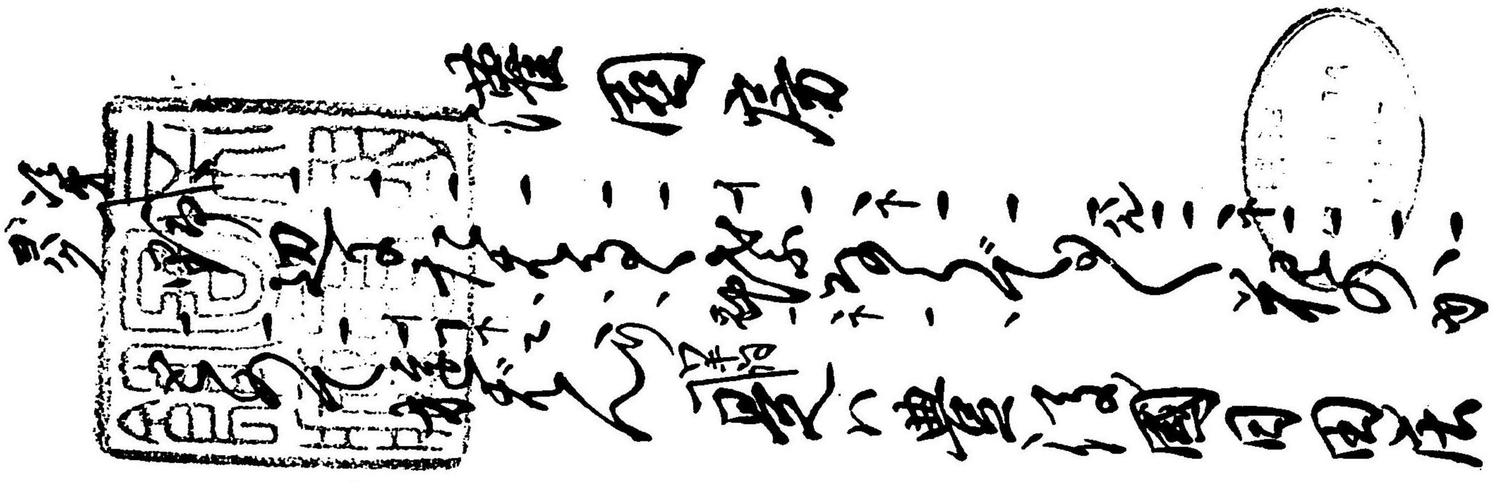
灌園房

42
444

255
207



灌園方ともたびの移ぎやを存の。ありウヤ者ら
ぬ事れつくられ海を拓出してウく。彼
べ程なくはやとも。長門をすぎて月
ひのさ。あさのタべのさびしくなる。紅
葉重なる枕。床の浦さよ著よりく
支花い清浄蓮坂して。天然の美景
を偽ふれば。二世の諸仏も是を愛し。

すぐさま人の声なまを慰むとかや。
我もまさ今いさ。さまを知る父の法前よ
供へやさんと跡追よ立出泳もれば
面白やを種蒔くを咲出てウく。おのが
さまく走り霧の玉をかざれ花の色。
光を添へて織姫のおり出なる錦の
と。見るも同さもむる年りて。ぶれを

わらそ承ましく　つゐのふきまれ成
法僧となり給ふべき身は　比方の
るすをばかなはぬ事にて候　是ハ豊
後國日田の庄に馬場富次郎と申者に
て候　我年来尊花の法教を受し　灌園
房家道と名称申て　然るをば法所
をも教へ給へ　笑止のうらみとのたまふの

かなぐ其灌園房の称を　わが父にて候　去
年此称を申まかりて候　何と仰候
去年の称は遷化とや　申くれ事
ひらう痛はしれはるゝかなゝさてふするやと
もあらばしてぞあるべく　床ぬる旅衣うち
拂ふともたくずめべ　かげらへ周々
なお在し昔ハ　尊のかれて師父を

[illegible]る濃と我。家よりのをれなる却わと
なれ。かゝ様ゝわれば。さや五年よりまゝ。
我九州を巡業し甲斐家えこ房職の拙家
ゆう。柳家えこ房職とやう。歳内の者
すゝて。鶯古柳よりまゝ[illegible]れば。ゆるされまず
を保なる。甚身過よりすぐらまえ
ひ五十銭の祝すゝて。ひ重職やはの待へ

四方の寄ますつとひ来て。祝ひやせば
甚席よ。浜門よ岳もひけらく。池れ
坊よこ房ゆるへ天中こ基ゆるとて
「く。実よ花道の重任ゆとやゆるて。家へ
ひ要よ清まゝ。都鄙よあまたの我へ
子へめゝゆる花枝。やこ此燈うすひて。行
ゆまゝよ洋ゆゝ。如何よゆ

今は寺なれども甲斐なき事なり。
其日の暮てゝ人べ。わが寺まて一枝を
乞ひかゝ人(ヒト)其人の所にかゝる作物なり。
さらば清園寺人のゆくゝ物語も影りに
べゝ。さてハ此西者ちと我家近の住た
まひ寺まそいふ。今文はなのかゝう
いや。是ハ杜若のいけられそいや。今も牧

法と推ぶられいう(ヒト)ん人の妻と文を
いそ。二代の清園と申ハ遠い一族の寺
ゆまそいや。菓子家遠まり影りよ。かき
つぼ人四季の活ゝ有まりは愛へ
人(シテ)仰れそく杜若ハ四季まよ花を持ハ
程よ。いつまもさまハ文なのゝ(上セル)季影よ
一一一一一一一一一一一一一一一一一一
まそ者のそ所一一一一一一一一一一一遠

ふるう（下、上ヒ地）四季をあらぬかきたれば春
いのちはさすやらん（シテ）非屋の杜鵑延
ぬるよ。花いつもみを重ねて。紫ふかき色
ひきくさもぞ（地上）暮いぬるかの心ゆん
（シテ）まづき紫草は花ぬるぬ。ぬるぬ
ぬ（地上）秋はさひきすがらとや。花ぬるぬ
まりやうん（シテ）暮ふかり花をうるして。開

き水りりりいと。合一中用ものそ
紫ふかしよりとと。だれ紫をそふと思
百せ（地上）さそと又をのおもも踐さば涙
（シテ）非枯紫ふとてまふて。甚紫
かれよいもひきく。花ぐらしく二
輪。ひらきをさしぐをおりその出をを
ぬらもよ（地下）うれしかな栄の。ゆるれ

色の添ければ花の陰やさしも、わきまへぬ
心もすがりしうら若き、眺むるにつけても
心なき枯草の、かれがれなれば心をも
なべても憂く虫の声も更けたり、衣やさぞ。
旅の労きやおいまさらん、古き縁あれどもいひ
並て一間のうちは入りはりし、庭の
面影すむもしれ夢さへげにふりし

昔の声の忍ばれて、荻ただねらぬ夢枕お
どろかす松風の、何もするかの宿は消えて
もうゆふぐれ、たびねすなし、鳴るひ
さればえて、何か残し、秋の夜すがれてさ
やすき有の色も枯れ果てて後
果ぐ夢来さしもて、又は姿を隠しもむ
風情却て住まのかよあり、此妙唯者と

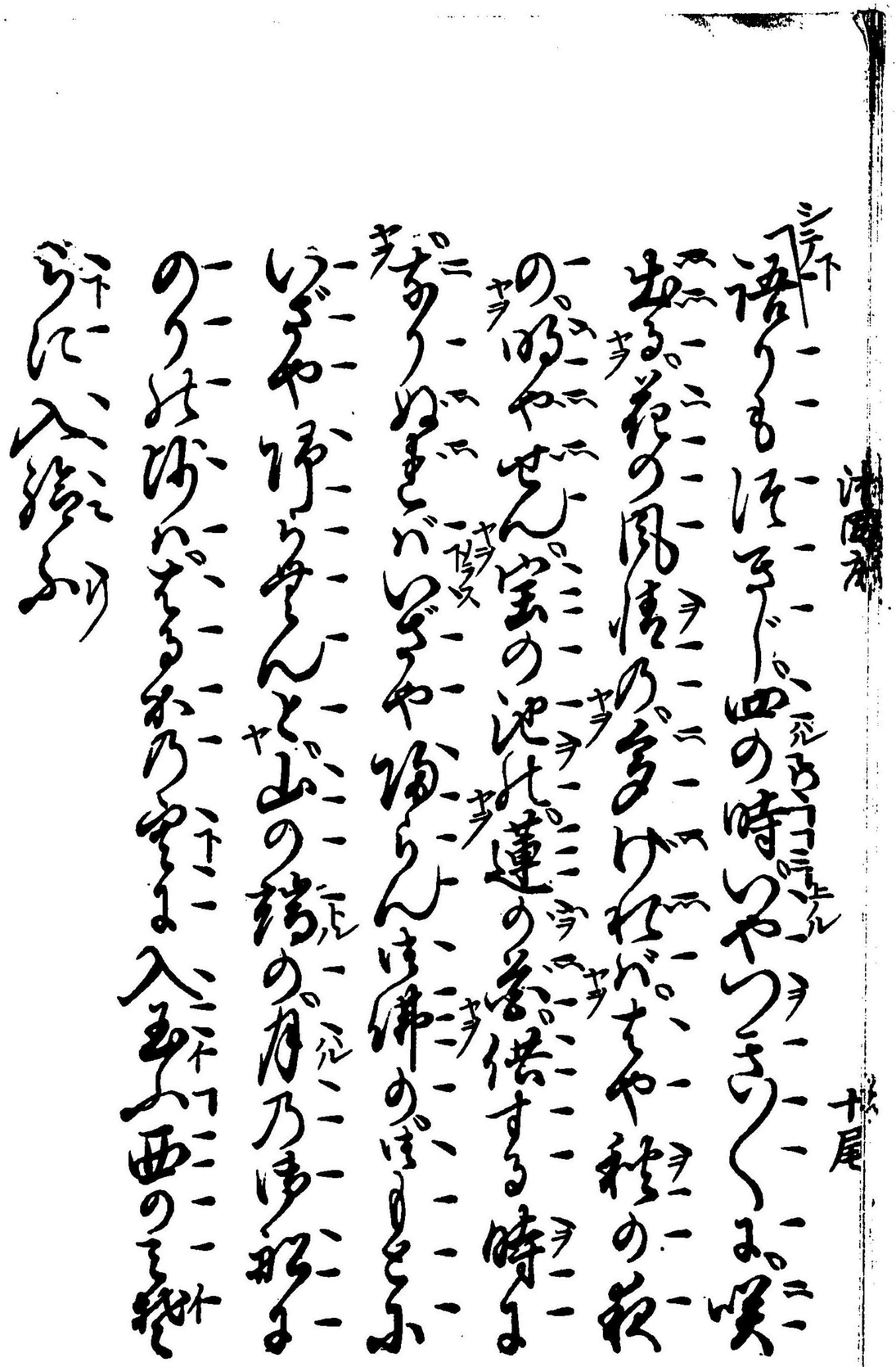
我と志るごとく年は昔まうして枝を折
てかんなさたてまつるもいとゝ面白
又すゝ行の生花なり　ワキ　ゆゑ
の前は宮方の海はれ又人まいがしや美ふ
てゐるやらん　シテ　よく美まても限りても
ばるゝとまつまれ人よまうさん為
来りたり　ワキ　ゆゑ有がしやさるふそも此事
の縁は源氏書よ　シテ　さてく語りまべ不
審いとゞ花ひら人　ワキ　ふんい志ぐ和花
の枝ぶきとりすわやうがひやうんば
是一流の人のひがこと種の花いさ屋うゞ
と知くゝ樹ってひ志ぐ屋ふ物の香瓶
の為よ三種の花の又えてひ是いわ何
なるはるのみてひ我　シテ　実まく不審し給

ふ物なれバ生花の心得ありても常に花に
二種ハ悪しく大輪小輪取長短
等取合て二種づゝ用ゆるもよし
けりバ去りながら時と場所によりて七
夕まハ七種とさし禮儀の席よハ松竹
梅又ハ桔梗ク添萱女郎花など人乃口
ずもいひならハし又出生もいさゝかあれ

バそれ〳〵かハらバおもむきハ替えの活花も
いまゝ有ければ出気し　まなび玉ふ
なよかく添浮様を稼ぐハ添ぐも浪ね
池ちの心法しと思ふなるべく　立花生
花の起原ハむかし天竺の舎利弗尊者
一對の瓶を造りいろ〳〵の花をそて盧
山乃風光を象り之を如来ニ献ぜし事

上元天皇
勢祇表まつりて。衆僧よむひのた
まつく。此盧山は須弥山の象をなして一
瓶の花は一の世界なり。即ち信陽は法
花三昧をかくどり美物美法なる事
中よりとほめたまふ。是法花道の始
なるなり。まつる所国まで。用明天皇は
清宮聖徳太子。彼の真理を受うる。此
の法の大祖。小野の妹子の大臣は授け
たまふ。子孫よりわを法花をたたへ
来て者くふ絶せぬ。此ものみる者は清さ
深きなり。されば貴賤乃わうちすくし
その末を汲みて。神仏の前を荘厳し
堂内の美飾を添へ。座席正しくして神
自ら清肅とあり。哲理悟入の道とうや

255
207

明治四十一年十一月十日印刷
同　年　十一月十五日發行

著作兼發行者　檜常之助
印刷　京都市上京區三條通麩屋町角十二番戸
（特電二千百九十番）